

## 粉体工学会への期待

Expectations for the Society of Powder Technology, Japan



松坂 修二\*  
Shuji Matsusaka

学会の役割とは何だろう。何に重きを置くかは人それぞれだ。視野を広げて見渡すことは大切だが、世の中は多方面に拡散し続けるばかりであり、今一度、基本的なことを考えてみたい。

いつの時代にも新たな研究領域は開拓されるものであり、そうでなければ社会や産業は進展しない。真理の探究や実用性を探るために論理的に考えて、適切な方法で結論を導き出す過程は科学的であり、新規性のある成果が得られれば公開していくのが正しい。それによって研究が体系的に進むと学術として社会に認められる。

効率的に学術を進展させるには、情報の発信と伝達の促進は必須である。公開された成果を利用して研究を行うと無駄な時間を費やすことはない。公開に至るまでの審査において、結論を導き出すための論理の妥当性は見極められる。こういうことを真剣に考える人が集まれば、それを適切に遂行できる機関を必要とする。それが学会、すなわち学術研究団体である。

日本学術会議が認める学術研究団体の要件は次のとおりである。①学術研究の向上発達を主たる目的として、その達成のための学術研究活動を行っていること。②活動が研究者自身の運営により行われていること。③個人会員の数が一定以上であり、かつ研究者の割合が半数以上であること。④学術研究（論文等）を掲載する機関誌を継続して発行していることである。

学会の役割として、研究発表会の開催、論文誌の発行、人材育成、産学連携、学際連携、国際化の推進など多岐にわたるが、研究者による学術の進展が根幹をなしていることに変わりはない。それを推し進めるために、研究成果を公開していかなければならないが、国内で発表するのと海外で発表するのは、場所が違うということだけではない。論文を日本語で記すのと英語で記すのは、言語が違うということだけではない。それぞれの目的に応じて、公開する方法を適切に選ぶのが正しい。会場の聴講者あるいは投稿する学術誌の読者を意識するなら、表

現方法を適切に選択していく必要がある。

投稿に関してもう少し詳しく見てみると、論文と解説では、それを利用する人が異なる。邦文と英文では伝える範囲が異なる。伝えるべき成果は同じであったとしても、その波及効果は違う。

さて、昨今の急速な情報化の進展は、研究者や学会に何をもたらしたのだろうか。情報の入手と成果の伝達に要する時間は大幅に短縮されたが、新たに行うべきことが増えたのも事実である。情報の伝達速度の増加に応じて社会の動きも速くなるので、決められた時間に行うべき量は増えるし、所在にかかわらずインターネットを介して遂行しなければならない。このようにして時間を奪われていくと、研究に集中したり、得られた成果を発信したりする時間が増えていないことに気付く。これまで以上に優先度を見直すべきだ。

研究成果は発信しなければ伝わらない。特定の人に伝えるだけなら、そのための方法はあるが、できるだけ多くの人々に場所と時間を限定することなく、情報を伝えることが重要と考えるなら、インターネット上で閲覧できる学術誌に論文を残していく以外に方法はない。

学会は組織である以上、会員増強、各種行事、他の機関との連携など、多くのことに取り組まなければならないが、学術の進展に重きを置くなら、上で述べた学会の基本的な要件を大事にすべきだ。

粉体工学会は、和文誌と英文誌を発行している。これらの機能を十分に発揮させることは特に重要だ。過去2年間の英文誌のインパクトファクターには目を見張るものがある。多くの人々が注目する学術誌で情報を発信することの意味を大事にするなら、学術誌の知名度と質の高さは常に考えておかなければならない。

海外に目を向けると、比較的上位に位置していた国際誌がこの数年で順位を下けている。その一方で、世界トップ10%の国際誌はさらに評価を上げている。学会や出版社の考え方が問われているのだ。加えて、研究者の論文の投稿に対する考え方も問われているのだろう。

情報化が進む今の時代、組織の評価も研究者の評価も、その統計データを世界中で即時に閲覧できる。そのデータが明日の動向を左右する。5～10年先を見据えた方針とそれに向けた基盤づくりが何よりも優先されるべきだ。

### （著者紹介）

京都大学大学院工学研究科 化学工学専攻 粒子工学分野 教授。  
1981年、広島大学卒業。同大学大学院修士課程修了後、東レエンジニアリング、動力炉・核燃料開発事業団を経て、1989年、京都大学工学部化学工学教室に着任。2010年より現職。京都大学博士（工学）。

\* 連絡先 mats@chem.kyoto-u.ac.jp